

アルフォンスお兄様が
現世に転生した場合。

皇ひびき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『胡蝶の恋』という乙女ゲームの非攻略対象であったアルフォンス・シュタットが現代に転生してきたら？

目次

1 0	9	8 (春原みこと視点2)	7	6	5	4 (みこと視点)	3	2	1
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
28	25	22	19	16	13	10	7	4	1

僕の名はアルフォンス・シュタルト・ウイルソン。

日本人の父とイギリス人の母を持つ、世で言うところのハーフだ。

父親には似ず母親似の為か、緩やかな流れを描く金髪と、初夏の新緑を映し出したような緑の瞳をしている。

僕には不思議な記憶があった。

銀髪の父を持ち、父に似たであろう美しい銀色の月を映し出したような金髪に湖面を映し出したような瞳、美しい妹がいた記憶。

アルフォンス・シュタルトと名付けられた僕。

緩やかなカールを描く金髪に緑の瞳。今の僕とあまり変わりはないように思う。

苛烈な月のような妹ビアンカだったが、記憶の中の僕にとっては、目に入れても痛くない程に溺愛していた。

妹のビアンカは甘やかして育った事もあり、我儘に育ってしまった。記憶の中の僕に

とつてはそれでも可愛くて仕方のない存在だった。

血が繋がってさえないなければ、この手に抱きしめてずっと離さなかったのに……。妹でなければ……何度そう願ったかわからない程だ。

それは父も同じで、苛烈で我儘であつても大切な母の忘れ形見である妹を愛していた。

そのせいもあつてか、妹を止めたり叱りつけるようなことは無かつた。

それが原因で彼女を毒殺されるとも思わずに……。

彼女を永遠に失うなんて思わずに……。

記憶の中の僕達で護りきれると思つていたんだ。そんなことはありはしないのに。

またいつかビアンカに会えるんじゃないか……、そんな思いを捨てきれず、彼女のいない世界を情性で生きていた僕。

そんな僕に現実残酷だった。

愛しい妹を喪う数年前の事だったか……。

僕が領地に行つてから1年ほど経つたある日の事。

ふと呼ばれる様にして、領地の屋敷のある一室に足を踏み入れた。

幼い頃に母が最後まで過ごしていた部屋だった。

見慣れない本があり、その中には手紙らしきものが挟まれていた。

『なんだろう…』そう思い手を伸ばすと、僕が赤ん坊の頃に亡くなった、双子の妹とその夫。本当の両親の事について書かれてあった。

今迄父と思っていたのは叔父であり、妹だと信じて愛していたビアンカが従兄妹……。

もしももつと早くに知っていたなら、王子の婚約者になどさせなかつた…。

男の執事なんて付けさせなかつた。男の友人なんて以ての外だ。

妹は我儘ではありながらも、僕を兄だと慕ってくれていた。今更従兄妹だと言って、愛を告げる訳には行かない。そして、苦しくはあつたけれど、その事実を無かつた事にした。

記憶の中の僕があの時、勇気を振り絞つて伝えていたのならば、ビアンカは死なずに済んだのだろうか…。

今度があるならもう間違えない。

後悔するくらいなら、無理しても妹を傷つけても、諦めるのでは無かつた。

何故そんな記憶が僕にあるのかわからない。だけどそんな思いが今でも僕の中に燻っている。

複雑な気持ちを含んだ記憶に悩まされる様になったのはいつ頃だったのだろうか。

記憶の中の僕が持っていた魔法も、風と土の魔法もこの頃から僕の中に芽生えていた。もし周りに伝えれば異端として扱われてしまっただろう。

周りには伝えるべきではない、何故かそう思えて魔法が使える事は、隠しつづけている。

コントロールの仕方なら記憶の中にあっただしね…。

僕が7歳位になった頃、その記憶と同じ様に母を病で亡くした。そして父は僕を見ると母を思い出すのか…、僕を避けるようになっていった。

まだ幼い僕は父の気持ちなど上手く理解できず、きつと勝手に傷ついていたんだ。

そんな時に父の故郷である、日本の父の実家らしき場所にしばらく預けられた。恐らく母に似た容姿の僕を目にしたく無かったんだと思う。

簡単な挨拶くらいしか日本語を上手く喋れなかった僕に、従従兄妹である春原みことは幼いながらに僕の淋しさを埋めてくれた。

言葉は理解出来なかったけれど、「みこがいるから淋しくないよ」そう体いっぱい

表現している様で、僕はここにも良いんだ…。

愛してくれる人はいたんだと、母を亡くしてから初めて信じられた。

母を喪つてしまった事も悲しかったけど…、不安な時悲しい時に、父親に遠ざけられた事。そんな自覚していなかった傷で、人知れず僕はショックを受けていたのだろう。

頬を熱い水滴が流れ落ちる。

母を亡くしてから初めて泣いた。

母が居なくなつて、とても悲しかった。泣きたかつたけど涙は流れず、『人として何か
が欠落しているのかなあ』と漠然と僕は感じていた。

そんな自分自身への不信感まで、洗い流していくようだった。

黒髪に黒目がちな瞳が、上目遣いに僕を見つめている。小麦色に焼けた肌を持つ小さな女の子に、僕は救われた気がした。

彼女が居てくれるなら、人でいられる。

大切にしたいと感じられる。愛したいと感じられる。

まるで記憶の中のピアンカがいた時みたいに。

それから、少し父の悲しみを理解できた様な気がした。

もしもピアンカの様に、みことを失つてしまったなら、僕は正気ではいられないかもしれないから。

そんな事を父に伝えたら、涙ながらに「済まなかった…」と謝られた。

父との関係はその後良好で、僕も父の力になって行ければとそう思える様になった。そして、春原みことという少女は、僕にとってのかけがえのない人になった。

記憶の中の僕みたいに、今度は絶対に間違えない。間違えたりするものか……。幼いながらも、そう深く心に刻みながら。

それからというもの、僕は時間がある時には日本にいるみことへと会いに行く。

男の子みたいに短い髪も、日に焼けて小麦色の肌も、元気いっぱい走り回り、海に潜るみことが可愛くて可愛くて仕方ないから、スキンスリップが過剰だったかもしれない。

たまに「いつまでも子供扱いしないで!」「誤解しちゃうからあ」とそう頬を膨らますみことに「可愛い!流石僕の天使ちゃん!」と頬にキスを落としていたり、抱きしめたりしていたのは記憶に新しい。

時を重ねていくにつれて、みことはあんなに可愛いのに、自分が女性として愛されるとは信じなくなってしまう様に思う。

都会で外見だけ着飾った女性達を知ったからだろうか。

「お兄様はモテるから彼女作ったら、もう遊びに来てはくれなくなるね、きつと」

彼女は中学生に上がる頃にはそんなことを言い始めた。

みことさえいれればいいという僕の気持ちは上手く伝わってないようだ。

だからといって、自身を卑下しているわけでもないみたいなのだけど…。彼女を尊重

しすぎて、手加減してしまつてたのが良くなかつたのか。

男の子の様に短い髪も、くるくる変わる表情も愛してやまないのは、みことだけなんだけどな…。たまにしか会えない事も手伝つて、感情のコントロールが上手く行かない。

高校に上がる頃には斉藤優吾と言う名の同級生が出来たらしい。メールなどの文面から親しさは伝わってくる。

彼女がユウくんと彼女が親しげに呼ぶ少年。遠目に見かけた事があるが、短めのミディアムヘアに眼鏡をかけている少年。整つた顔立ちをしていて、磨けば光るものを持つているように感じる。既に見ることに好意を抱いているようだった。

僕がスキンシップ過多なのが原因なのか、みことは男子構わず気軽に触れる。そのせいで馬鹿な男に誤解させないだろうか、少しだけ過去の自分が悔やまれる。

みことには僕だけがいればいいのに。

一通り根回しは終わつていて、もしもみことが僕を求めてくれたなら、父にも叔父さんや叔母さんにも、結婚の許可を取つているのに、彼女の気持ちだけままならない。

「アルフォンス程のルックスなら、うちのみこと以外だつて、選り放題な気がするのに。またモデルの誘いを断つたのでしよう？」

叔母は悪びれずにそんなことを言う。

「自分を晒すのも性に合わないし、みこと以外の異性には興味はありませんから」僕はいつも通りそう答えるけど、「昔から相変わらずブレないね」そう叔父に苦笑いされた。

大人になつたららのんびりと、意識してもらえればいいかと鷹を括つていたけど現実はそう甘くないみたいだ。

18歳を過ぎたら異性として見て欲しいからもう遠慮はしない。

4 (みこと視点)

私が従兄妹のアルフォンスお兄様と出逢ったのは、3歳位な頃だったらしいけど、当時の事を私はよく覚えていない。

けれど、臆げに憶えていた事であったのか、夢なのか自信がない出来事があった。悲しそうな優しい笑みを浮かべた王子様みたいに思える素敵な男の子が、傍にいたようなそんな記憶がある様な…。

けれど、それはお兄様ではないだろうし誰だったのかな…。お兄様はいつも会う時にはニコニコしているし、お兄様はともも明るい人だから。それとも本当に夢だったのかなあ。

来日出来るタイミングがあれば、よく会いに来てくれるお兄様…。お兄様と呼ぶのは私の柄じゃないかもしれないけれど、お兄ちゃんと呼ぶにはアルフォンスお兄様は、見た目も雰囲気も整いすぎていたので私もお兄ちゃんと呼びにくいところもあって、落ち着いた呼び名だった。

「アルフォンスと呼んでよ」何度となくそう言われたけれど目上の人を呼び捨てに出来ないから、今の呼び名で勘弁してもらった。

ずっと私の自慢の従兄妹だった。

昔から私を可愛がってくれているようで、気軽に抱きしめてきたり、頬にキスを落とすお兄様。「私が誤解したら困るでしょ」って恥ずかしさから、何度も伝えてたけど、苦笑いを返されるだけに終わってしまっていた。

中学の頃、美人なクラスメイトにせがまれてお兄様を紹介した、彼女には悪気はなかったのだろうけど「みことちゃんには勿体ない位かつこいい人だね！」そう言われ、なんとなくお兄様の傍ににいるのに、私は相応しくないんだろうな…そんな劣等感を抱いた様に思う。

また、たまに都会に出てみると、綺麗な人ばかり！

それと比べると『私は男の子みたいだなあ』『こんな私を自身では好きだけど、みんなに好かれるタイプじゃないよなあ』と、どこか諦めてしまったんだと思う。

だったら大切な親戚やお友達になれたらいいなあ。

それからだろうか。お兄様やユウくんみたいな外見が整った人が、私を好きになってくれるはずは無いって無意識に恋愛対象から避けていた。

乙女ゲームの世界でだけ、夢が見られたら幸せだと思える。そうして乙女ゲームにどんだんハマっていく私。気がついたら、「胡蝶の恋」という作品にはまってしまっ

皇太子でもあるフィリップ王子も金髪金眼で格好いいし、1番の推しは悪役令嬢の執

事のマクシミリアン！

いつも笑顔を見せないクールなキャラで、その人が唯一笑顔を見せる対象であるヒロイン。

そんな立場になれたら素敵だと思う。

でも私には無理だから今だけ夢を見ているゲームもいう名の甘い夢を…。

みことは祖父が住んでいた家を譲り受け、一人暮らしを始めた。明日は最近ハマっているゲーム関連の本が届く予定との事でみことはご機嫌様だ。

せっかくだから、「僕も付いて行つていいかい?」と確認すると、「いいよ」との二つ返事でそれだけの事で嬉しくなる。

僕はみこと海女の仕事を終える時間に、祖父の家まで向かい、みことと合流すると一緒に本屋に向かった。

早速本を購入したらしいみことが、僕に小さく「外で待つてるね!」と声をかけると、先に店を出ようとしていた。

本の中を見るの家まで我慢できないのかな?

そんな彼女がいつもの事ながら愛らしい。

そのあとを追う様にして店を出ると、買ったばかりの本を、大切そうに抱えていたはずのみことは、大柄な青年にぶつかった様だ。

青年は、彼女の背中に手を回し、みことの姿勢が安定したところで、本を拾って距離を置く。

「ああ、ぶつかってしまつてごめんなさい！欲しい本を買えて浮かれてました。それに助けていたいただいてありがとうございます！ございます！」

ペコリと勢いよく頭を下げ言い募るみこと。

見方によれば、男の子の様にみえるくらいに切りそろえたショートカットの黒髪。健康的に日焼けした小麦色の肌、惜しげもなくホットパンツからスラリと伸びる足。明るく元氣のいい声。つい愛らしさに見とれてしまい反応が遅れてしまった。

「みこと！大丈夫だった？ 怪我してない？」

「マクシミリアン!? 私の…最推しっ!? はわわ〜……」

みことが青年の顔を見た次の瞬間、そう叫んだかと思うと顔を赤らめ男の顔をまともに見ていられないとでも言うかの様に、顔を下に向けた。

「お兄様……、大丈夫。怪我はしてないよ。この人が転ぶ前に助け起こしてくれたから……」

僕もつられる様にして青年の顔を見ると愕然とする。

記憶の中の妹の執事だった…、マクシミリアンにそっくりだったからだ。

「従兄妹を助けてくれて、本当にありがとうございます」

そう言い軽く会釈をすると、マクシミリアンにそっくりな彼も、なぜだかひどく驚いた顔をしていた。

それにマクシミリアン似の彼を見たみことの反応は、何なんだ？ その辺りも理由を知りたいけれど、みことの様子を見るに彼とはあまり長く接触はさせたくないな。

彼が驚いていた理由も気になるけど、みことと引き離す方が先かな。

記憶の中の知り合いによく似た青年。

それに、みことは何故彼を見てマクシミリアンと言ったのか……。それにマクシミリアン似の彼を見て何故頬を染めるのか……。

僕の中にある記憶は、夢なんかじゃないのかもしれない。初めてそんな風感じてしまいい、身体に振るえが走った。

僕達が会釈をして別れたあと、恐らく泊まっているだろう数少ない旅館に、思考の中で当たりをつけつつ、僕はみことの肩を抱く様にして、家路へと進む。

何故かお気に入りの本を抱えたみことは興奮気味。一体何が……。

「みこと、何かあったのかい？」

そう聞くと、みことは興奮気味に口を開いた。

「お兄様……、私最近『胡蝶の恋』ってゲームにハマっているのだけど、さっきの人悪役令嬢の執事のマクシミリアンにそっくりなの。大好きなキャラが2次元から飛び出し出来たみたいで、ドキドキしちやっとな」

執事のマクシミリアンそのワードが少し気になった。

悪役令嬢の執事……。まさかビアンカの……？

まさかな。みことがいない時に、彼褐色の肌で黒髪黒目の彼が、僕を見て驚いた理由を聞いてみる必要があるかも知れない。

「みこと、僕もそのゲームになるな、やっているの見たらだめかな？」

祖父の家だったみことの家に上げてもらうのは初めてで、心做しかドキドキするけれ

ど。

「お兄様とゲームの話が出来たら、私も嬉しい！」

飛び跳ねるように喜びを顕にして、気軽に抱きついて来るみこと。可愛いけれど、他の男にも異性として見られてないという、謎の自信があるから誰にでもこうなんだろかな…。そう思うと苦笑するしかない。

なんとなくだけれど、マクシミリアン似の彼ももう少しみことといったら、危なかったかもしれない。

一人の時に会わなくて良かった。

敵になったとしても、追い落として見せる自信はあるけれど、これ以上敵をわざわざ増やしたくないしな。

天真爛漫で優しいみこと。美人という括りではないかも知れないけれど、くるくる変わる黒目がちな瞳も、彼女の人間性に惹かれてやまない、僕のような存在がいる。

ユウくんとかやらも恐らくその類たぐいの人間なのだろう。気のせいかも知れないけれど。マクシミリアン似の彼もみことの外見ではない何か…に惹かれてしまう気がした。

心做しか彼を懐かしむような気持ちだが、あつたのは否めない。記憶の中だけの存在であり、幼馴染というわけではないけれど。近くで育ちこの世界でいうのならスパダリ系の有能さの為だろうか、記憶の中の父が費用を出してくれた。その為に、僕と同じ様に

学園で学び、有能さに磨きをかけていった彼は。

そんな時代を共に生きた同志に、とても似ているからか……。彼を傍に置きたい気持ちは何故かある。

この記憶も厄介なものだな。

そう思いながら、ため息を漏らす僕だった。

みことから楽しげに胡蝶の恋について話を聞くと、僕の記憶とリンクする部分があった。

みことは近くにある段差に座り込み、先程手に入れた本の人物紹介を見せてくれた。妹の婚約者だったフィリップ王子、僕と同じ騎士になったノエル……。公爵家令息のエイデン、妹の執事だったマクシミリアン、南国にある国の王子王女であるメイカとミルカ等。

…ビアンカに多少であれ関わる人物であり、悪役の令嬢の描写が記憶の中の妹に酷似していた。

長くサラサラと風になびく銀髪、湖面を写し出したような瞳は少しつり上がっていて、小柄でまるで記憶にある妹を絵にしたらこんな感じであろうか。

「ふうん……」

見知った顔ばかり書き上げられた人物紹介を眺め見ると、そんなつぶやきが漏れてしまった。

「それでね。私の推しはこの人なんだけど、お兄様……。さっきの人、似てると思わな

い??」

「みことが指差すところに目線をやると、褐色の肌、黒髪黒目の青年がいた。さつき見かけたとおり身重は僕より少し低いくらいだ。」

「みことは僕より彼みたいなタイプが好みなの？ 身重はどうしようもないから…、日焼けすれば少しは好みに近づくのかな？」

「自分なりに好意は伝えてたつもりだけど、伝わってすらいなかったのか…。従兄妹としての好意としてしか受け入れて貰えてなかったのかと、そう思うと少ししよんぼりしてしまう。」

「お兄様はお兄様の素敵なところが沢山あるから、無理はしないで。昔も日に焼こうとして肌が赤くなるだけだったでしょう？」

「ワタワタしながら、みことがいう。」

「お兄様は充分素敵ですから！いつもモテてるのだし自信を持ってください！」

「みことが愛してくれないのなら、意味がないのだけど…」ぽそりと独りごちると、その言葉を上手く拾えなかったであろうみことが「大丈夫？」心配そうに声をかけてくるから、可愛くて仕方ない。

「みことは優しく可愛くて…、本当に大好きだよ!!」

「つい嬉しくなって、僕の天使みことをギユムギユムと抱きしめ、頬にチュツチュツとキスを落

とす。

天使ちゃんお風呂上がりなのか、石けんのいい匂いがする。

周りにいる人達はその光景を見慣れているからあまり気にしてない。

「みことちゃんとアルフォンスクンは、いつも仲が良いねえ〜」そんなことを言いながら知り合いのお婆ちゃんが通り過ぎる。

「お兄様ここになじみすぎじゃないかな？」

ぼそりとみことが呟くけど、可愛いからそのまま抱きしめる。

「みんな見慣れているから気にしないよ、天使ちゃん可愛い!!」

まだ祖父の家にはついてないけど、気にせずみことを堪能する僕だった。

8 (春原みこと視点2)

海女の仕事を終え、シャワーを浴びてからお兄様とやつと届いた本を受け取りに行く事になっている。

髪はそのうち乾くかなあゝなんてうちを出た。

お兄様は「風邪をひかない？」そんな事を心配してくれるけど、いつもの事なのであまり気にしないようにした。

本屋さんでお目当ての本を買ってお店を出ると、マクシミリアンみたいな人とぶつかった。

すごく格好良くて焦ってしまったけど、お兄様も心配してくれてるし、落ち着こう、私。

けれどゲームの登場人物が、画面から出てきたって言われても納得出来るくらいの人だ。そう簡単に落ちつける訳もなく、買ったばかりの本を片手に、近くにあった低めのブロック塀に腰掛けて、お兄様に話してしまった。

「それでね。私の推しはこの人なんだけど、お兄様……。さっきの人、似てると思わない?」

お兄様は、推しの事を話すと笑顔だった顔を歪め、「みことは僕より彼みたいなたいプが好みなの？ 身長はどうしようもないから…、日焼けすれば少しは好みに近づくのかな？」なんて聞いてきた。

お兄様はお兄様なのに。白く透けるような肌も緩くウェーブのかかった金色の髪も、初夏の新緑がかかった瞳だって素敵で従兄妹じゃなければ、きつと好きになった。

だけど、従兄妹じゃなかったら相手にして貰える訳ないけれど。

「お兄様はお兄様の素敵なところが沢山あるから、無理はしないで。昔も日に焼こうとして肌が赤くなるだけだったでしょう？」

ワタワタしながらもそう伝えた。お兄様が辛そうなお顔してるのは悲しいし。

「お兄様は充分素敵ですから！いつもモテてるのだし自信を持ってください！」

「……………」

お兄様がぼそりとなにか呟いたけど上手く聞き取ることが出来なかった。

心配になって「大丈夫？」と声をかけるのが精一杯。

「みことは優しく可愛くて…、本当に大好きだよ!!」

なのに、お兄様は感極まったみたいなお顔をしてそんなことを言う。

そして言葉だけでは足りないと言っても言うように、だけどギュムギュムと抱きしめ、頬にチュッチュツとキスを落とす。

お兄様……、アールグレイの様な爽やかな香りがしますね。柑橘系の香りもほんのりしてるし。少しだけ香るホワイトムスクの甘い香りもお兄様に合ってる気がする。

安物だけど、前にお兄様にプレゼントをした、練り香水をつけてくれるんだ……。なんだか私があげた香りを纏っているお兄様、ドキドキします。抱きしめられてるからか彼のつけている香水が私にも移ってしまいそう。

島にいる数少ない人達はその光景を見慣れているからか、あまり気にしてないみたい。

「みことちゃんとアルフォンスクンは、いつも仲が良いねえ〜」そんなことを言いながら知り合いのおぼちゃんを通り過ぎる。

「お兄様……になじみすぎじゃないかな？」

ぼそりと私が呟くけど、そのまま抱きしめられたまま……。

「みんな見慣れているから気にしないよ、天使ちゃん可愛い!!」

まだ私のお城にはついてないけど、気にせず抱きしめる続けるお兄様だった。

せめてお家についてからにしてくれなかな。でも二人きりだと、もつとドキドキしてしまいそうだし……。

悩んでも仕方ないって思いながら、ドキドキするのをとめられない私だった。

みことを抱き上げ、家まで向かおうとしたら「流石に恥ずかしいからやめて！ 重いと思うし怪我してる訳でもないんだし！」と真つ赤な顔で抗議された。

「天使ちゃんなら軽いし、抱き上げていたいけどな」

僕はそう言うのと、みことのサラサラのシヨートカットに頬ずりする。

ふわりも香る石鹸の香りだろうか。シャンプーかもしれないその自然な香りに胸が満たされる。

『離したくないなあ』

「外人はみんなスキンシップ過多なの？ そうなの？」

そんなことを呟きながらみことは更に頬を赤らめるので仕方なく、可愛いみことを地面へおろした。

そんな事はない。君だけにしかないのに。他の女性ひとに求められても意味はないのに。君はもつと自信を持ってもいいのに。

僕の中にそんな思いが去来する。

「どうして君にだけ伝わらないんだらうなあ」思わず小さくぼやいてしまった。

「お兄様、何か言った？」

みことには聞こえてなかったみたいで良かった…。

「ううん、何にも。そろそろ家に向かうか」

軽くみことの頭をポンポンと撫でてから足を進める僕に「変なお兄様…」とポツリと呟くとみことも、彼女の家へと歩き始めた。

帰り道に、ざっくりとしたゲームの世界の説明を聞けば聞くほど、なんだか記憶との一致がなんだか多い気がした。

まるで、ゲームの世界からでも転生したみたいじゃないか。馬鹿馬鹿しい。そう思いながらも『まさかね…』、そんな思いは拭いきる事は出来なかった。

領地で騎士として生きていた、僕と同じアルフォンスの名を冠する男の記憶。今の僕が隠し持っている魔法のような力。

僕の記憶の中にある、言えなかったけど従姉妹で大切なビアンカの執事だったはずの男マクシミリアンが攻略対象？

ビアンカの婚約者だった、リーベツへ王国の王子フィリップ。偶然にして、夢とのも符号が合いすぎている。

ノエルというのはダウストレア家にいた様に記憶している。

一部の者だけが記憶を持ち転生しているのだとしたら？

マクシミリアンと名乗った彼を見てから、なんだろうか落ち着かない…。

記憶に関しては、気にしない様にしてきたけど有耶無耶なままにして良いのだろうか。

けれども、僕は僕だ。

従姉妹だけど、みことを愛してやまないのは紛れもなく今の僕のはず…。

楽しそうにゲームの話を語るみことをちらりと見やる。

いつもの事ながら、活き活きと楽しげだ。

今はそんな思いは横において、彼女の家にお邪魔させてもらう事に集中すべきだ。

身近な存在になれてるとは言っても、祖父の家だったみことの家に上がらせて貰えるのは初めてのことなのだから。

「魚を捌くのは得意だから家に着いたら、お父さんから貰ったお魚食べようか!」

『記憶と向き合わなくてはならないのでは?』そんな複雑な思いはあるけれど、料理が得意ではないというみことの手料理に、胸を躍らせる僕だった。

しばらくみことと話しながら彼女の家に着く。

もつと早くに来てみたたくはあつたけれど、仕方ないかなみことが可愛くて、抑えきれない場合もあつただろうし。

なんて自分に言い訳しながら神妙な顔で敷居をまたぐ僕。流石にゲームを見せてもらうだけなのに、ふらちな事はしないだろう？

なんて心の中で言い聞かせてる姿なんか、みことには見せたくないなあ。なんて独りごちていると、みことから元気な声がかけられた。

「お兄様は海鮮丼作つたら食べるよね？ちよつと待つててね」
そう言つて実家から貰つたららしい魚を取り出す。

鼻歌でも歌いながら魚を捌いていくみこと。
「可愛いなあ」小さく独りごちる僕。

みことさえ僕を意識してくれたなら……。男として見てくれたなら、根回しは万全なの
に彼女は意識してくれない。

家族としては愛されているだろうけれど、異性としては見てくれない気がする。

なんなら男としては壁すら作られてる様に感じる時がある。

どうでもいい女性にはモテている自覚はあるけれど、唯一無二の存在であるみことではないと、モテたって意味はないのに。

叔父さんや叔母さんには、「みこと結婚してもいいよ」と言うなら、応援すると言われているし、彼女の言動に想いの他僕が振り回されてるのを楽しんでいる節がある。彼女といると少し僕の大人の様な態度が壊れるらしい格好悪いな…。

ふと、みことを見ると、真剣な顔をして魚を捌いている。

僕もなにか手伝えれば良いけど、必要性がなくて料理はあまりした事がない…。

そういえば簡単に作れるお汁としてとろろ昆布のレシピをこの間教わったな…。

「わけぎととろろ昆布ある？ あと、顆粒だしと塩と醤油があれば…。 以前知り合いに教えてもらった簡単なおすまし僕も作って見ようかと思つて…」

「お兄様の作つたものつて、初めてかも！ 今すぐ準備するね！ すごく楽しみ」
「期待するほどの事は出来ないよ」

そう言つて僕は、お椀にとろろ昆布を多めに盛り付ける。その上に顆粒だしと塩と醤油を回し入れてわけぎを乗せる…。

僕だけならともかく、みことも口にするのだから慎重に。お椀を二人分作つて、それにお湯を回し入れる。

「シンプルな味付けなんだけど、簡単に美味しかったから、作り方を聞いておいてよかったよ」

僕がそういうと、「すごい」と喜んでくれみことが可愛い。

「私も冷蔵庫にあったマグロ切って、甘海老？ いていくら乗せたただけだけど食べて！」
「ただどうか。頂きます」

そういうと「食べる前の挨拶まで出来るとか、日本人のお嫁さんも貰えちゃうね！」
「初恋の人が日本人だからね」

みことからそんな言葉を聞きたくなくて、つい本音がこぼれ落ちてしまった。